

イントラネット「日本福祉大学大学院国際社会開発研究科（通信制）同窓生の広場」 今後の運営について

2005年5月8日

山田浩司

1. 背景

イントラネット「日本福祉大学大学院国際社会開発研究科（通信制）同窓生の広場」（以下NFU-ISDと略称）は、2004年4月に一部の一期生の発案を契機として立ち上げた。会員制のグループサイト「イントラネット」の無料サービス版 Intranets Basics を活用し、掲示板と予定表、名簿管理とメール配信、リンクといった基本的機能だけでこれまで運営されてきた。

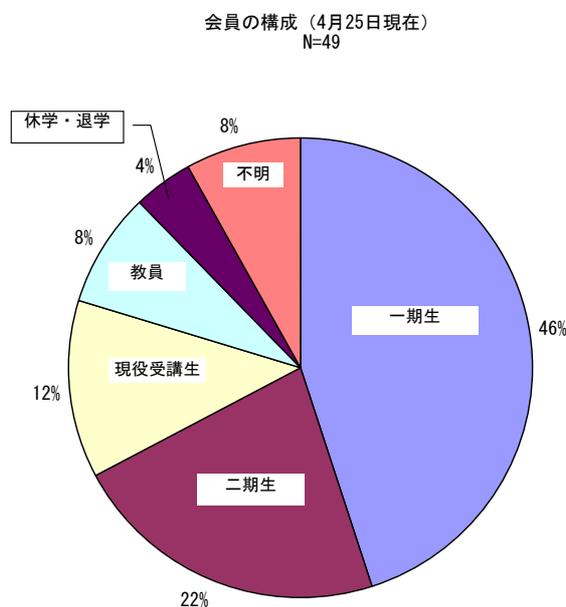
筆者は、管理人として当初 Intranets Pro の1ヶ月無料お試しサービスを利用した「電子会議室」「共有フォルダ」といった有料機能の使い勝手について初期の加入会員に問うたが、十分なフィードバックが得られないまま試用期間が終了したため、有料機能は当面使わないことにした。

しかし、会員数が仮登録中の会員を含めて49人に達し、掲示板が非常に手狭になってきたことや、会員間でファイルの共有ができない不便さが感じられつつあるところであり、ここで今一度有料機能追加の可能性について考えてみることにした。

2. 現状

参考までに、会員の構成に関する現状を分析してみたい。まず、下図1をご覧ください。

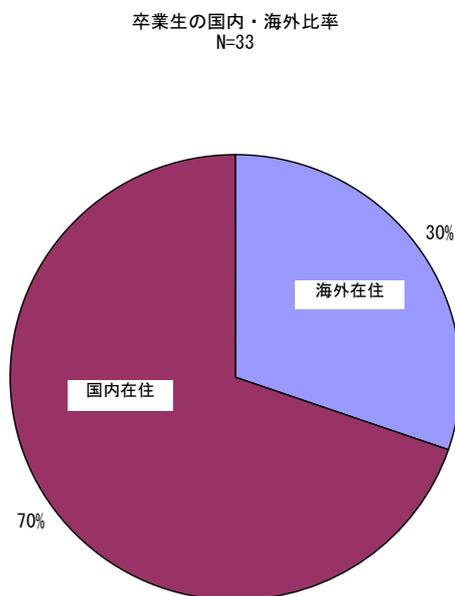
図1
会員の構成



会員数は現在49名で、ステータスが確認できない方が4名（8%）いる。この方々の多くは、二期生か現役受講生のいずれかであると考えられる。仮に有料機能の追加を考えた場合、その財源の中核となるのは一期生と二期生で博士前期課程修了済の33名（67%）であろうが、こうしたOB/OGの方々が国内在住である保証は必ずしもないと考えられる。そこで、下図2において、卒業生のうち国内在

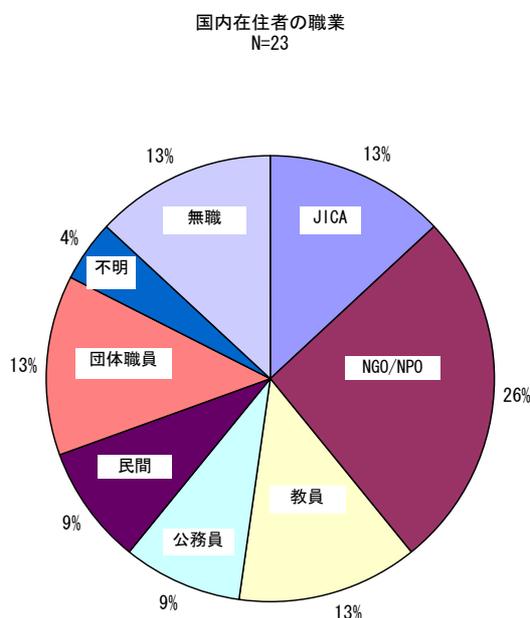
住者がどれくらいの割合を占めるかを示してみた。

図2
卒業生の
国内・海外在住
比率



母数33のうち、国内在住者は23人(70%)となる。では、この国内在住者23人に対して有料機能追加のための「カンパ」が期待できるのかどうかを見るため、現在の職業を調べたのが下図3である。

図3
国内在住者の
職業



この職業構成から会員の支払い余力 (affordability) を判断することは困難だが、大胆な仮定をすれば、NGO/NPO 勤務、現在無職という9名の方々にカンパをお願いすることは非常に気が引けるところであることがわかる。これを差し引いた14名が、最もカンパを期待できるグループと考えられる。但し、これらの方々が全てイントラネット参加でメリットを感じておられるかどうかは、掲示板への参加頻度で判断すれば、さほどでもないのではないかと考えられる。

結論として、有料機能の追加によって生じる月 5,040 円という料金を、カンパという形で募って負担していく計画は、かなり大きなリスクを負うことになるものと考えられる。過去 2 年間の OB/OG の構成を単純に適用すれば、カンパを呼びかけてすぐに応じていただける可能性が高いグループは毎年修了する学生の約 3 割という程度であり、意外とカンパを集めることは難しいのではないかと危惧されるところである。

3. 有料機能追加のメリット

前節で既に有料機能追加することによる月 5,040 円の料金をカンパで賄うモデルのリスクについては述べたが、それでは有料機能を付けることでどのようなメリットがあるのだろうか。イントラネットのサイトをご覧いただくと有料機能の一覧表があるが、中でも最も重要と思われる機能は次の 2 つであろう。

- (1) 電子会議室（意見の交換や伝達事項を掲示）
- (2) 共有フォルダ（会員間で電子ファイルを共有）

最初にお断りしておかねばならないのは、有料機能を利用することで得られる便益は、会員一人一人によって大きく異なるであろうという点である。例えば、普段の業務の中で様々な資料を作られていてそれを会員と共有したいと思っておられるような方は、おそらく共有フォルダが利用できることによる便益をそうでない方と比べても大きく感じられることであろう。即ち、共有フォルダの想定ユーザー数は意外と少ないのではないかと考えられる。筆者自身も、過去 1 年間で共有フォルダが利用できればと感じたことは 3 回程度しかなかった。¹

他方、電子会議室の想定ユーザーは、少なくとも掲示板に頻繁にメッセージ掲載されている方であり、従って共有フォルダよりは幅広いユーザーに便益をもたらすと考えられる。勿論、得られる便益の大きさは、そのユーザーによる掲示板の使用頻度によっても変わってくるであろう。

今回、有料機能追加の検討をする背景として、第 1 節において 2 つの理由を挙げたが、どちらかというところ、掲示板の交通渋滞をいかに緩和するかという課題に対する対応策として、本提案をさせていただいている。掲示板のメッセージは書いた本人によって消していただくよう管理人からはお願いしているが、なかなか過去のメッセージの整理・消去は進んでいないのが実情であり、しかも会員数が増加してきたため、掲示板のキャパシティだけでは対応しきれないのではないかと懸念される。

4. 代替策の検討

そこで、共有フォルダ機能よりも電子会議室機能を優先させ、電子会議室の機能をより経済的に利用できる手段がないかと考えてみた。メーリングリストも最初は考えたが、メーリングリストの場合は受け取りたくないメッセージも全員向け発信されるというデメリットがあるため、代替策の検討からは除外し、ここでは、自分の関心あるトピックについて自分の好きな時間に自由に閲覧・投稿できる機能を検討した。

(1) ゆびとま

ウェブ同窓会「この指とまれ！」(<http://www.yubitoma.or.jp/>) で、筆者は個人的には出身の中学校、

¹ 自分が執筆したレポートや GRIPS での講義に使ったパワーポイントのプレゼン資料、日本福祉大学大学院の口頭試問の日程表などである。

高校について登録して実際に利用しているが、このサイトでは、卒業年次によるウェブコミュニティを形成し、その中でファイル共有や電子掲示板といった機能を利用することができる。従って、想定されるグループの構成員の多くが参加するとしたら、このサイトの使い勝手は極めて良いと考えられる。但し、このサイトの場合の最大の問題点は、大学院のカテゴリーを設けておらず、コミュニティの新設が今のところできない点にある。加えて、個人的な印象としては、参加者が数名しかいないコミュニティに常時参加するようなモチベーションの維持は極めて難しい。繰り返しになるが、想定されるグループの構成員がクリティカルマスに達するまでは、既存の構成員ですら頻繁にアクセスしようという気にならないという点にも大きな問題がある。「ゆびとま」全体での登録会員数は3百万人強である。

(2) ソーシャルネットワーキングサービス (SNS)

5月7日に日本経済新聞土曜版で紹介された。ネット上で名前や友人関係、日記などを公開して友達の輪を広げるサービスで、趣味の仲間作りなどプライベート目的での利用が多いが、仕事で役立つ人脈を築いたり取引先との関係を強めたりするのにも有効だと言われている²。

友人の紹介がないと会員登録できないため、筆者自身が内容を承知しているのは自分が登録している「ミクシィ (mixi)」だけであるが、ここにあるウェブコミュニティでは、掲示板を利用して共通する趣味や関心事、考えなどを他のメンバーと共有することができる。参加メンバーは誰でもトピックを作成して共有したい話題を提示することが可能である。また既にあるトピックに対して自分の考えを書き込むことができるので、前節で述べた電子会議室に近い活用を行なうことができる。

この会員登録は無料なので、mixi内に大学院のコミュニティを立ち上げ（日本福祉大学としては既にコミュニティがあるようだが）、筆者より紹介メールを会員の皆様方にお送りして各自で会員登録とコミュニティ参加の登録をしていただくことで、掲示板を利用することができるようになる。参加のモチベーションの維持に関しては、本サイトの登録会員数は14万人と言われていて「ゆびとま」よりは少ないものの、参加したいコミュニティを自分で選択することができ、日本福祉大学大学院の枠を超えてより大きくネットワークを拡張される外部経済性が期待できるという点で、モチベーションの維持は行ないやすいのではないかと考えられる。

5. 結論と提案

以上の検討の通り、イントラネットに有料機能を追加して会員からカンパを募るという案については、実現可能性が低いものと筆者は判断した。従って、本件の提案はしないことにしたい。

他方、電子会議室機能については、必要ならばソーシャルネットワーキングサービス (SNS) のウェブコミュニティ掲示板を活用することを提案したい。筆者の方で、会員のご希望に応じてmixiの紹介メールをお送りし、ご自身で登録いただければと思う。SNSは、これ以外にも日記（既に開設済のブログとのリンク設定も可能）や書評投稿といった興味深い機能もあり、利用の仕方によっては大学院関係者間の情報・意見交換以外にも用途は広がってゆくものと考えられる。

ご検討いただければ幸いです。

以上

² SNSが日本に入ってきたのは2004年3、4月頃で、筆者がイントラネットの利用を考えた当時には国内であまり普及していなかった。